

学生による授業評価の結果と分析：初期データの考察

著者	赤坂 和之, 竹内 裕司, 入野 耕一, 坂本 明雄, 大内 和夫
雑誌名	高知工科大学紀要
巻	2
号	1
ページ	196-205
発行年	2005-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10173/122

学生による授業評価の結果と分析：初期データの考察

赤坂和之 竹内裕司 入野耕一 坂本明雄 大内和夫

高知工科大学 教育センター
〒 782-8502 高知県香美郡土佐山田町宮ノ口 185

E-mail : education@ml.kochi-tech.ac.jp

要約：本稿では、高知工科大学で行っている学生による授業評価システムを要約し、平成13年度から15年度にかけて実施した評価の回収方法と提出率、および評価結果を分析した結果を報告する。新体制での実施が13年度であるため3年間の限られたデータではあるが、1学期から2学期になるにつれて減少する評価票提出率、教員と学生の努力点は高いが講義目標の達成度は比較的低いこと、出席率に比例して平均評価点が上昇すること、中人数で学生とのコミュニケーションの多い授業が高い平均評価点を得ていること、各教員の評価点と3年間での評価点の変化には強い相関が見られなかった、という結果が得られた。ここでは、評価結果の要因と相互関係、学生の授業評価能力を含めた今後の評価システムの考慮点について議論する。

Abstract : This article presents a brief summary of the lecture evaluation system by students in Kochi University of Technology, and the results and analyses on the methods of collecting questionnaires, retrieval rate and the evaluation results from the data acquired from the 2001 and 2003 academic years. Although the amount of data is limited as the new evaluation system started in 2001, the following preliminary results are obtained. First, the retrieval rate of questionnaire decreases toward the end of an academic year. Second, the initial objectives of lectures are not achieved satisfactorily despite the effort made by both the students and the lecturers. Thirdly, the average evaluation points increases proportionally with increasing attendance rate. Fourth, high evaluation points are gained by medium-sized lectures with interaction between students and lecturers; and finally there appears no correlation between the average points of individual lecturers and the change of points during three years. These results, possible causes and their interrelations are discussed together with issues to be considered for the future evaluation system.

1. はじめに

本学では平成9年の開学以来、学生による授業評価の質問項目を全学的に統一したものを作成し、実施してきた。しかし、授業評価を行う

かどうかは担当教員の意思に任せ、その集計結果は担当教員および学科長へフィードバックさせたただけであった。また、12年度は、一部の教員からの要請もあって質問項目を大幅に増やし

たところ、逆に学生からは不評であった。

13年度からは、質問項目だけではなく評価の集計方法なども全面的に見直して、新たな体制で実施することになった。また、その評価結果は本学の教員評価システム（1）における各教員の『授業・演習等』についての評価ポイントを計算する際にも利用されている。ちなみに、本学で行っている学生による授業評価システムの内容については多くの大学からの問い合わせがあり、ユニークなシステムとして他大学で参考にされている。

本稿では、まず評価票の集計方法などを含めた本学の授業評価システムについて解説し、13～15年度の評価票の提出率と評価結果を分析し結果を要約する。分析は、評価の経年変化と出席率依存性、各質問の経年変化と学科・科目群別の評価点の推移、そして教員別の評価点の経年変化、および高評価点の教員の特徴抽出を中心に行った。最後に評価結果と今後の課題を要約する。

2. 質問項目

質問項目はすべての科目について同じで、下記の7つである。

問1：教員はこの科目の達成目標を明確に示しましたか。

問2：教員は学生がその目標を達成するために努めましたか。

問3：あなたはその目標達成のために努力しましたか。

問4：あなたはその目標を達成でき、十分な力がついたと思いますか。

問5：この科目はあなたの今後の学生生活や社会生活に役立つと思いますか。

問6：この科目あるいはその関連分野が好きになりましたか。

問7：最後にあなたの受講状況について質問します。次の5つの状況にもっとも近いものを選んでください。

問1～6までの回答は

「0 いいえ」

「1 どちらかと言えば『いいえ』」

「2 どちらともいえない」

「3 どちらかと言えば『はい』」

「4 はい」

の5段階の選択肢から答える。

問7についての選択肢は次の5つである。

「0 ほとんど欠席した」

「1 3分の1程度は出席した」

「2 およそ半分は出席した」

「3 3分の2程度は出席した」

「4 ほとんど出席した」

問1と2は担当教員を評価する項目であり、問3と4は学生が自己評価する項目である。しかしこれは、学生が努力し、学生に十分な力がつくように、教員自身が導くことができたかを実質的には聞いている。更に、問5と6も学生自身がこの科目の受講を今後どのように活かしていけるかを聞いているが、その回答が肯定的になるような教育を教員に求めているといえる。

3. 評価票の提出率

3.1 実施要項

授業評価のアンケート用紙を配付する際には以下の実施要領を学生に説明している。

『授業評価の実施について』

学生諸君は、担当教員と一緒に授業を良くしていくという自覚を持って、それぞれが履修した授業を慎重かつ正直に評価してください。また、評価項目の中には学生諸君が自分自身を評価する項目もあります。よく考えて回答してください。なお、評価結果は授業担当教員にフィードバックするとともに、教務部のホームページに公開します。

『授業評価の実施要領』

1. それぞれのクォータが終了する約2週間前に、学生全員に「授業評価提出用封筒」と、「授

業評価用科目コード表」および回答用マークシートを配布します。

- それぞれのクォータで終了する全ての科目について評価し、評価結果を記入したマークシートを「授業評価提出用封筒」に入れ、封筒に所定の事項を記入して教務部にある提出ポストに入れてください。
- 提出期限は、それぞれのクォータの最終日です。期限までに提出しなかった学生には、各学科のアドバイザーを通して注意を喚起します。特に正当な理由がないにもかかわらず提出しなかった場合は、該当するクォータの単位が認められない場合があります。

授業評価の提出期限を成績が出てからにして欲しいとの学生からの要望があった。しかし、成績によって授業評価が左右されるものではないはずであり、その意味で、各クォータの最終日を提出期限とすることは適切であると考え

る。数名の学生から『実施要領 3』の「提出しなかった場合は、該当するクォータの単位が認められない場合があります」という内容の実体についての質問があった。この記述は「強制的な提出」ではなく、「皆さん提出してください」という意味であり、実際に単位を認めなかったという事例はない。

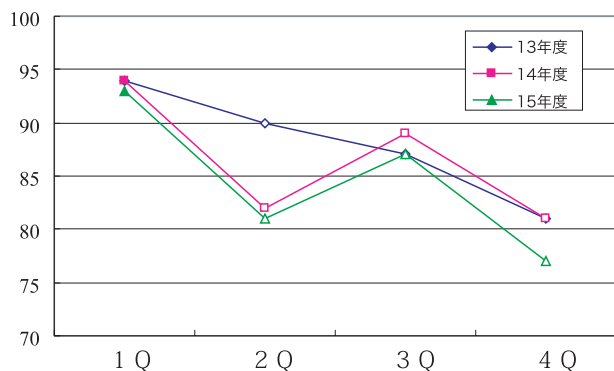


図1 クォータごとの評価票提出率の変化
(縦軸の提出率は%の単位)

3.2 評価票提出率の分析

平成13年度から15年度までの3年間におけるクォータごとの授業評価票提出率を図1に示す。

提出率の定義は「評価票を1科目でも提出した学生数」の「当該クォータに1科目でも履修登録している学生数」に対する比とした。一方、「当該クォータの評価票提出延べ数」の「当該クォータの履修登録延べ数」に対する比という定義も考えられる。後者の定義での計算を一部のデータについて行ったところ、後者の定義による提出率が前者と比較して低下した。その理由としては、提出はしているが科目コードが未記入であったり、自分の学生番号を書いていたりする、いわゆる無効票が多いことが挙げられる。提出したものすべてが無効であっても前者の定義では「提出した」ことになるが、後者の定義では「提出していない」ことになる。

対象となる学生は、学部生および大学院生である。13年度1クォータから14年度の1クォータまでは、各学科窓口および授業中に説明書類とマークシートを配布し、成績によって授業評価が左右されないように、評価票をクォータ最終日までに提出する方式で実施した。14年度2クォータからは、学内用ホームページからのコンピュータ入力とマークシート提出の併用となっている。コンピュータ入力の実施以降、全提出者数に対するコンピュータ入力者数の割合は常に85%以上となっている。

13～15年度の平均提出率は年度が進むにつれて下降ぎみである。各年度のクォータごとの提出率を示す図1では授業評価の提出率に関する2つの傾向が見られる。まず、第1の傾向として、13年度を除いて、1学期末となる2クォータと2学期末の4クォータに顕著な提出率の低下がある。14年度2クォータの提出率の低下は、コンピュータ入力を導入したためと考えられていたが、15年度にも同じ結果が得られたことから、学期末の提出率の低下は、評価票提出が夏

期休暇および春期休暇の直前であるため授業評価への関心が薄れてきたものと思われる。また、13年度にこの傾向が見られなかったことは、本方式の導入年度ということで休暇直前にもかかわらず、学生の授業評価に対する関心も高かったためと考察される。

第2の傾向は、年度末になるにつれて提出率が低下することである。考えられる原因としては、年度末になるにつれ授業についていけず勉学意欲を失っていく学生が増え、授業評価に対する問題意識も低下していくことがあげられる。この結果は、いくつかの国立大学における授業評価の回収率と同じ傾向である(2)。ちなみに、文献(2)で対象となっている大学(新潟、鹿児島、名古屋)の平均回収率は65%であり、この回収率の定義は不明であるが、本学の3年間の評価票提出率の平均値86%は非常に高いものであるといえる。

4. 授業評価の考察

授業評価の考察では、大学院科目を除いた学部の授業を対象としてデータ解析を行った。ここでは、各質問の年度平均、各質問の時系列的变化、学科別の年度平均、各教員の評価の推移について考察を行った。

4.1 各質問の年度平均

大学院を除いた学部授業の評価全体の平均では、平成13～15年度における授業評価の全体評価が、2.77 → 2.80 → 2.83と年度ごとに上がっており、講義の充実が年度ごとに図られていると考えられる。

この評価点の上昇傾向は、学生の評価基準が異なるからとも考えられる。しかし、後述する「4.4 学科別の年度平均」では、主に1年生が受講している共通教育科目の評価点が、13年から15年にかけてわずかではあるが下降していることを除けば、ある一定の高い評価点を保持している。一方、情報システム工学科の14～15年

を除き全学科の平均評価点が上昇している。このことから、学生の評価基準と評価点の年度変化にはあまり相関性はなく、年度ごとに上昇している評価点は授業改善の結果と推察される。

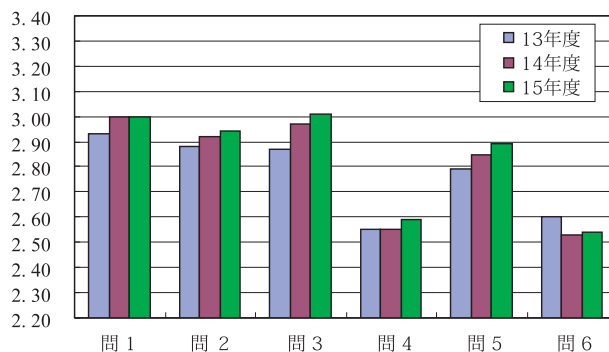


図2 各質問の年度ごとの平均 (最大4点, 最小0点)

各質問の年度ごとの評価を図2に示す。各質問の評価点は0から4までなので、平均評価点も最小値の0から最大値の4までの範囲となる。このデータから言えることは、授業は将来役立つと思われる内容であり(問5)、教員も学生も努力しているにもかかわらず(問1～3)、目標を達成することが困難で力もついていないし(問4)、その科目の関連分野が好きになれない(問6)、ということである。この段階で言えることは、上の結果は教員と学生が無駄な努力をしているという深刻な問題を提起しているかにみえる。しかし後述する「4.2 出席状況と評価点」の考察から、この結果は授業の出席率の低い少数の学生に当てはまることであり、出席率の高いほとんどの学生は比較的高い評価点(問4の3年間平均点2.75)を与えている。

4.2 出席状況と評価点

問7の受講状況では、学生の出席頻度を5段階に分けて質問している。平成13～15年度の出席状況は、0(ほとんど欠席)と答えた学生がそれぞれ1504(4%)、1982(5%)、1091(4%)人となっており、1(3分の1)と答えた学生が1206(3%)、1109(3%)、550(2%)人で、2(約

半分)と答えた学生が5607(15%)、1692(4%)、951(4%)人となっており、3(3分の2)と答えた学生が4399(12%)、4057(10%)、2486(10%)人、そして4(ほとんど出席)と答えた学生が年度順にそれぞれ24265(66%)、32876(79%)、20714(80%)人であった。3年間の平均では、ほとんど欠席が4.3%、3分の1出席が2.7%、半分出席が7.7%、3分の2出席が10.7%、ほとんど出席が75.0%となっている。3年間を通して全体的に出席状況は非常に高い平均値を示している。

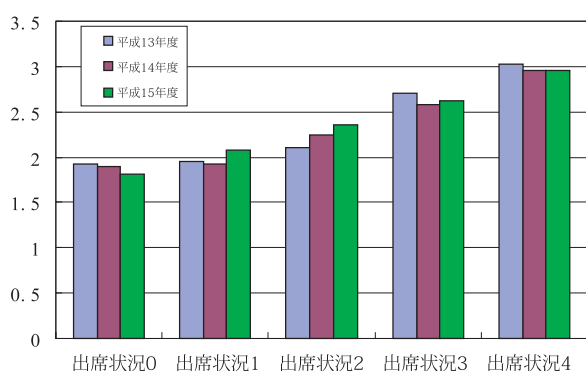


図3 出席状況別の全質問に対する平均評価点

図3は出席状況ごとの全質問の平均評価点である。各年度に少しの差はあるものの、出席頻度が高くなるにつれて評価点も上昇している。授業に出ていない学生に授業評価ができるのかという疑問はあるが、ほとんど欠席している学生による3年間の平均評価点が1.88で、ほとんど出席している学生による評価点が2.98と大きい違いをみせている。

次に出席状況ごとの各質問に対する評価結果を少し詳しく説明する。問2(教員の努力度)に対する平均評価点は、図3の全体平均ほどではないが、出席頻度が高くなるにつれて上昇している。学生自身が努力しているかという問3に対する評価点と出席状況の相関性は非常に高く、ほとんど欠席している学生による3年間の平均点が1.67で、ほとんど出席している学生による平均点が3.16と、両者の差が約1.5と大きな開きとなっている。出席頻度の低い約5%の

学生はあまり努力をしないが、出席頻度の高い75%の学生は努力しているといった当然の結果が得られている。

出席状況別の考察で最も興味深いのは、「出席状況ごとの問4(達成度)に対する平均評価点」である。ほとんど出席していない学生と3分の1出席している学生(全体の7%)の3年間の平均が1.50であるのに対して、ほとんど出席している学生(全体の75%)の評価点が2.75と大きく上まわっている。3年間の問4の総平均が2.56なので、出席状況の良くない学生による授業評価が達成度の全体平均値の低下の原因となっている。ちなみに、問6のこの科目または関連分野が好きになったかという質問に対する評価においても、ほとんど欠席している学生の3年間の平均評価点が1.62で、3分の1出席している学生が1.70、半分出席の学生が2.01、3分の2出席の学生が2.41、そしてほとんど出席している学生は2.73の高評価点を与えている。

ほとんど出席していると答えた全体の75%の学生による13~15年度における授業評価の全体評価は、3.02 → 2.96 → 2.96と非常に高い平均点となっている。

以上の考察から言えることは、出席状況の良くない10%未満のアンケートに答えた学生が全質問の評価点、特に学生の努力度と目的達成度に対する評価点に低い点を与えており、ほとんど出席している75%の学生は比較的高い評価点を与えている。評価表を提出していない12~15%の学生の中には出席状況の良くない学生も含まれていると考えられるので、低い評価点を与える学生は全学生の10%を越えるものと予想される。しかし、アンケートに答えた約75%の学生にとっては、【教員も学生も良く努力しており】、十分とは言えないまでも【ある程度の成果をあげている】と結論づけることができる。また、この結果は、出席率を上げる工夫をすることによって多様性を持った学生に対して授業の全体的な底上げが可能ではないかということ

を示唆している。

4.3 各質問の時系列的変化

図4は各質問の時系列的変化である。図4にあるように問1～3の評価点は高く、わずかではあるが上昇の傾向がみられる。平成13年度後半にかけて「力がついた(問4)」と「関連分野が好きになった(問6)」と答えた学生が多かったが、理由は明確ではない。新評価システムが導入された13年度を特殊な年度とすれば、14年度から15年度にかけて全体的に評価点が「わずかに上昇傾向」と言える。また、14年度2クォータでは、すべての質問に対する評価点は1クォータに比べて低くなっている。これは、コンピュータ入力を開始した、しかも夏期休暇前のクォータという特異な状況であったことが原因と思われる。15年度の2クォータにはこのような傾向は表れていない。この点を除けば、評価点には各年度のクォータとの顕著な相関性は見られない。

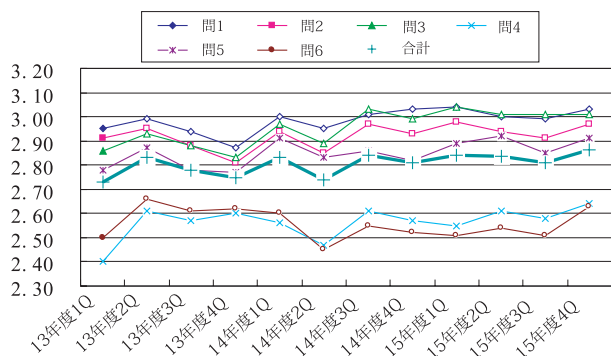


図4 各質問の時系列的変化

4.4 学科別の年度平均

図5は学科別の平均評価点の年度変化である。物質・環境、知能機械、電子・光、および社会の各システム工学科に関してはほぼ並行に右肩上がりとなっており、授業改善の成果が表れていると考えられる。一方、情報システム工学科の平均評価点が平成14年度から15年度にかけて0.09ポイント下がっており、共通教育もわずかではあるが下降している。

図5で注目すべき点は、社会システム工学科の評価点が他の学科と比べて非常に高いことである。本学の社会システム工学科は、従来の建築学科と土木学科を融合した構成になっており、講義内容もマネジメントやデザイン等の社会性と芸術性のある科目群と構造・材料の理数・工学系の科目群からなっている。また2年次後半からの科目は、40人前後のクラスで演習・実習・計画といった学生と教員のインタラクションが比較的多い内容となっている。次項の図6にあるように、中人数程度のクラスで教員が学生とふれあう内容の科目の平均評価点が高いことがわかっている。これが社会システム工学科の評価が高い要因となっているのではないかと推察される。

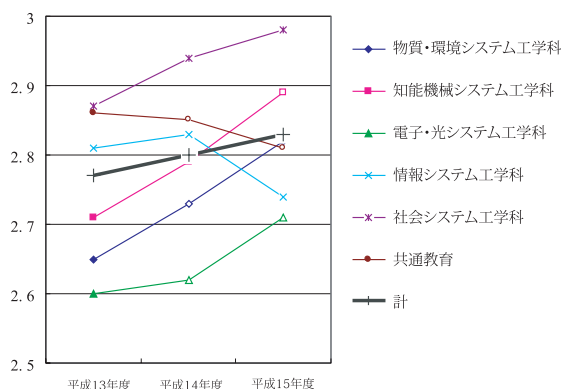


図5 学科別にみた年度ごとの平均評価点

4.5 科目群別の年度平均

科目を「英語」、「実験」、「実習・演習」、通常の座学である「通常授業」にわけて年度平均の推移を算出した結果を図6に示す。図から、通常の授業は他の実験・実習系の科目群と比べて低い評価点であることが見て取れる。実験と演習・実習に共通していることは、小あるいは中人数のクラスで、教員と学生のインタラクションが多いことである。一方、通常授業は、中から大人数のクラスで教員から学生への一方通行的な内容である。「英語」が高得点を得ているのは、実験と演習・実習との共通点があるためと推察される。まず英語教育では25

～30人の中規模の能力に応じたクラスで実施している。1年生には、「読む」「聞く」といったいわゆる Input skills の演習に近い内容で、教員が独自に作成したビデオ等の視聴覚を多用し学生とのコミュニケーションが多い授業であり、2年生の授業は、「書く」ことを中心にした Logical thinking の内容となっている。

このように平均評価点の高い科目群は、【中人数のクラス】で学生との【インタラクションの多い】授業内容であることがわかる。なお、各科目群の経年変化には多少のばらつきはあるものの顕著な共通点は見られなかった。

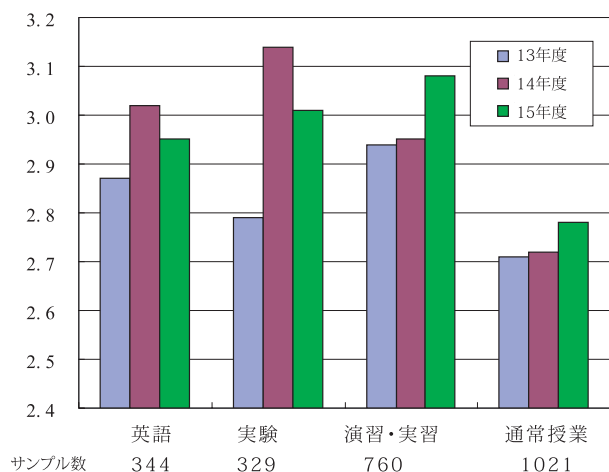


図6 科目群別にみた年度ごとの平均評価点

5. 各教員の評価の推移

5.1 対象データ

平成13年度から15年度に在籍していた教員のうち非常勤講師を除いた教員を対象としてデータを集計した。データは、教員が1人で担当し、評価アンケート提出者が6名以上であった学部科目について、各年度の提出合計数がそれぞれ100以上となった教員69名を評価の対象とした。

5.2 各教員の評価の推移

まず、全体的にみて、非常勤講師の授業と複数教員担当授業を除いた平均評価点は、平成13年度が2.76、14年度が2.74であったが、15年度には2.83と大幅に上昇しており、授業改善の

効果が表われていると言える。

より詳しい教員ごとの評価点に関しては、13年度→14年度において授業評価が上がった教員数(率): 34人(49%)

14年度→15年度において授業評価が上がった教員数(率): 45人(65%)

13年度→15年度にわたり評価が上がっている教員数(率): 19人(28%)

13年度→14年度において授業評価が下がった教員(34人)中15年度に授業評価が上がった教員数(率): 26人(74%)

13年度→14年度において授業評価が上がった教員(34人)中15年度に授業評価

が下がった教員数(率): 15人(44%)

となっており、半数以上の教員がフィードバック

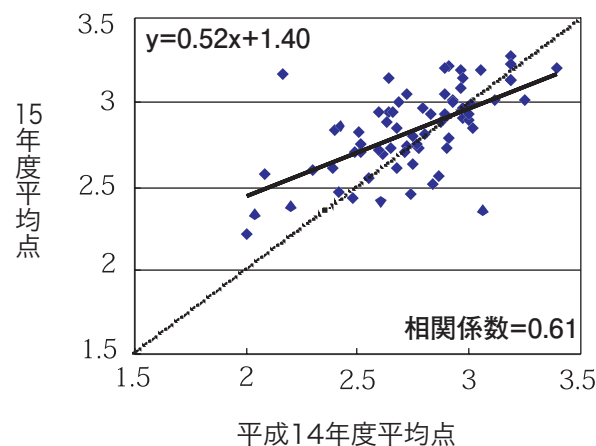
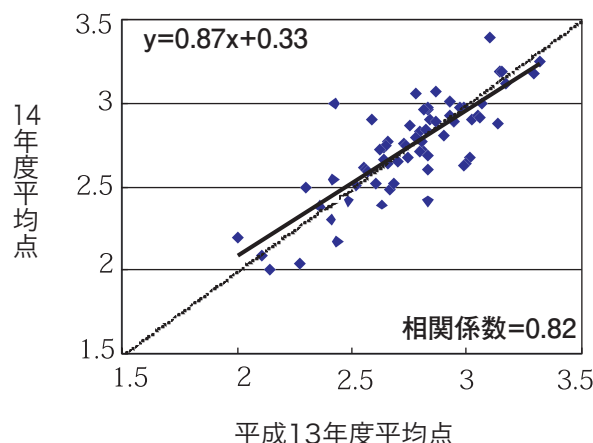


図7 各教員の平均評価点の散布図と回帰直線

上:平成13年度に対する14年度
下:平成14年度に対する15年度

クされた結果を元にして講義内容の改善を実施していることがわかる。

図7と図8からは、13年度 → 14年度よりも14年度 → 15年度の方が評価の高い教員において評価を下げていることが回帰直線の傾きからわかる。図8の改善率は【後年度の平均点】 ÷ 【前年度の平均点】である。14年度 → 15年度においては、全体において65%の教員が評価をあげているにもかかわらず、改善率の回帰直線は20%の下げ率となっている。前年の評価が高い教員ほど、次年度に評価を下げている傾向が見られる。13年度から14年度にかけては評価があがり、15年度に評価を下げた教員は44%と高く、評価の高い教員は次年度に評価を下げ

る傾向がある。

改善率の全体平均に関しては、

13年度 → 14年度の平均改善率 = 0.99

14年度 → 15年度の平均改善率 = 1.04

となっており、15年度に向かったの改善率の上昇が見られる。また、平均点以下の教員の次年度の改善率が1.07に対して平均点以上の教員の改善率が1.01と大きな変化が見られない。以上のデータからは、評価の低い教員は次年度には授業改善を行っており授業評価に反映されていることが分かる。

5.3 高評価点の授業内容の特徴抽出

授業で高い評価点を得ている教員のアンケート調査から共通となる特徴抽出を行うことで高評価点となる授業の要因の特定を試みた。アンケート対象となる教員は、各学科で最も評価点の高かった3科目の授業担当者15人、英語と数学の各教室から各々2人の計19人で、回答者は14人だった。以下は各質問と回答の要約である。

『質問1：習熟度の幅が広い学生に対する工夫』

基礎を繰り返し教える、習熟度にあわせた講義、実習を取り入れる、などの工夫があるが、一般的には習熟度の低い学生への対策が主となっている。

『質問2：学習意欲や出席率を高める工夫』

出席はとらないが出席を兼ねた小テストなどを実施している授業が半数位あるが、授業内容と形態によって異なる。いくつかの授業では、実験や授業に関連した成果などを利用して学生に動機付けをする、あるいは興味を持たせる工夫をしている。

『質問3：学生の事前・事後学習への指導』

宿題を出すことや演習などの事後学習を勧められているが特別な指導はしていないという回答がほとんどであった。

『質問4：成績評価（小テスト・レポートの多用、

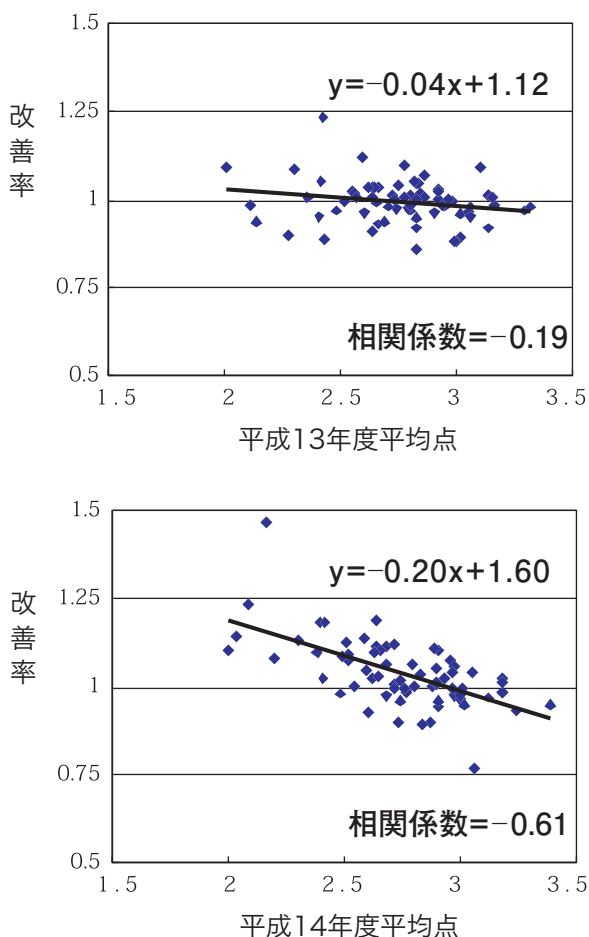


図8 各教員の改善率の散布図と回帰直線

上：平成13年度に対する14年度

下：平成14年度に対する15年度

試験の回数・形態など)』

ほとんどの回答で5～6回以上の小テスト・演習・レポート・試験結果をもとに成績評価を実施している。

『質問5：授業時間外における学生個別指導』

必要な学生や教員室に来る学生に個別指導をしているという回答が圧倒的に多かった。

『質問6：テキスト・資料などの教材、ITの利用』

多くの回答では、自作の工夫した教材を使用しており、ITはほとんど利用されていない。

『質問7：座学と体験の組み合わせ』

半数以上の回答で、座学に実験や実習を何らかの形で取り入れおり学生とのインタラクションのある授業となっている。「特になし」という回答が3件あった。

『質問8：その他（何でも結構です）』

講義のみの授業とくらべて演習を取り入れたら評価点が上昇した、1回の授業で1回学生に驚きを与えられるように配慮している、コミュニケーションのある授業、教員の熱意が学生に伝わってくるような授業がよい、などのコメントがあった。

以上の結果から、評価点の高い授業の特徴としては、実習や演習などを取り入れた学生とのインタラクションの多い内容で、習熟度に対応した自作の教材を利用しており、成績評価のほとんどは複数の試験・小テスト・レポートなどをベースにしていることがあげられる。アンケートから読み取れることは、教員が熱意を持って授業をしていることで、演習時間を大幅に超えても理解するまで何度もレポートを書き直すなどの【厳しさ】もあわせ持っている。ちなみに、熊本大学では平成13年から学生による投票で最もよかった授業と教官名の選出を行っている(3)。それによると、優秀教育者の選出理由は、授業は「難しいが教員が熱心で学生の理解度を考えながら行う」ことであった。また、優秀教育者の教育方法としては「理論と実際を関連づけ、学生を優しく厳しく教育し自

主性が生まれる工夫と、対話を利用して理解度を深める」ことなどが挙げられている。以上の結果は、これまで周知されてきたものとはいえ、本稿の結果と共通する内容となっている。

6. まとめ

本稿では、高知工科大学で平成13年度から15年度にかけて実施した学生による授業評価データを集計、分析した。全体的には、授業改善の底上げはできていると思われるが、出席状況の良くない学生と教員の努力が空回りしているといった傾向も出ている。本分析から得られた主な結論は以下の4点である。

(1) 評価票提出率は、2と4クォータに減少し、学年末になるにしたがい低くなる。2と4クォータの減少は両クォータが休暇前であり学生の評価に対する関心が薄れているためと考えられ、提出率が学年末になるにつれて減少する原因は授業に熱心な学生が残ることや評価に対する問題意識の低下などが考えられる。

(2) 各質問に対する全体的な評価点を見ると、授業の目標は比較的明確に説明されていて教員も学生も目標に向かって努力はしたが、満足する達成度は得られなかった。しかし、出席率別の評価点の考察からは、約75%のアンケートに答えた学生のうち約75%が授業にほとんど出席しており、3年間の平均評価点が3.16とほとんど出席していない学生の評価点1.67を大幅に上回っている。このことから、出席状況のよい学生にとっては【教員も学生も良く努力しており】、十分とは言えないまでも【ある程度の成果をあげている】という結果となっている。また、授業の出席率を上げる工夫をすることにより、評価点が上昇する可能性があると考えられる。

(3) 平均評価点の高い授業は、【中規模】の人数からなるクラスで、学生と教員の【インタラクション】が多い授業内容となっている。座学中心の通常の授業では、教員から学生への一方

通的な内容ではなく、ある程度の学生とのコミュニケーションを導入することで授業改善が可能であると考えられる。

(4) 教員ごとの評価点の推移に関しては、評価点の低い教員の次年度の評価点が上昇しており、授業改善の効果は表れていると考えられる。評価点の高い教員は次年度に評価点が減少しており、少なくとも次年度には同等の評価点を得られるような授業を行う努力が必要と思われる。

「学生の授業評価はどれだけ正確か」「学生に授業を評価する能力はあるのか」という疑問は常に多くの教員から発せられる質問である。学生が授業評価をする際には、好感の持てる親しみやすい教員の授業に高い評価点が与えられるといった心理的な要因があるとされている(2)。さらに、単位が比較的簡単にとれる授業や易しい授業に高い評価点が与えられる傾向があるとも言われている。本解析では、出席状況の良い学生による授業評価は比較的信頼できるものと考えている。しかし、より信頼性の高い評価システムへの改善には、複数の質問項目に同じ評価点を与えている回答を除外する方法(4)などが考えられており、高知工科大学にお

いても質問数や各質問の相関性を考慮したアンケート内容と分析方法の検討が今後の課題の一つとなる。

さらなる授業改善に向けて、現代の多様化している学生にやる気を起こさせる魅力ある授業を目指して、達成可能な目標を設定しそのための授業内容と方法の改善に本稿が参考になれば幸いである。

文献

- (1) 坂本明雄, 岡村甫, “人事制度と教員評価システム,” 高知工科大学紀要, 創刊号, 42 ~ 51, 2003.
- (2) 渡辺勇一, “学生による授業評価の平均値は後期に高くなる,” <http://www.ac-net.org/home/watanabe-y/03106-hyouka2.html>.
- (3) 里中忍, 岩井善太, 安藤新二, 藤吉孝則, 岩佐学, 伊東龍一, “学生の投票による教育評価・改善の試み,” 工学教育, 第51巻, 6号, 64 ~ 70, 2003.
- (4) 原村嘉彦, 岩本静男, 穴田哲夫, 黒澤秀夫, “授業アンケートの解析,” 工学教育, 第52巻, 6号, 66 ~ 71, 2004.